発達障がい・視覚障がい支援に共通の触覚教材の開発（２）

―教材開発における留意点―

企画責任、話題提供者　藤本浩一　（神戸松蔭女子学院大学子ども発達学科）
司会、話題提供者　竹内伸宜　（神戸海星女子学院大学心理こども学科）
話題提供、指定討論者　山本利和　（大阪教育大学教育学部特別支援教育講座）
話題提供、指定討論者　林　照子　（園田学園女子大学人間健康学部総合健康学科）

［企画主旨］

前回のラウンド・テーブルでは、図形マトリクス教材を特殊な紙（カプセルペーパー）に立体コピー機で転写したものを用いて、アイマスクを装着した晴眼小中学生に課題を遂行させ、その問題解決方略を視覚障害児と比較した。今回は、まず、前回の実験結果のビデオ分析をより詳細に行い、教材の特殊性とそれを用いた認知訓練の可能性を検討する。次に、従来からあった視知覚能力検査をベースに触覚版を作成し、試行結果を報告する。系統的探索、情報の同時処理、メタ認知などの観点から検討を行う。さらに、触覚教材に転写することを視野に入れて作成した２種類の教材を、健常大学生に課題遂行させた結果について、ワーキングメモリー訓練という枠組みを加えて議論する。（藤本）

［話題提供：マトリックス教材の課題解決場面における行為様式の比較］

2012 年 8 月に参加したワークショップ、フォイヤーシュタインの Tactile 教材と比較しつつ、前回の発表において小学生から高校生若干名を対象として行った実験記録の再分析を行ったので報告する（林）。課題刺激に対する探索行動が触覚次元に限定されることにより、晴眼の発達障がい者にとって行為様式がどのようにしてシステマティックなものに変化してゆくかについて、発達障がい児と視覚障がい児が触覚マトリックス教材に取り組む場面のビデオ分析結果を紹介する中で論じる。着目する点としては、１．指先や手での行為にあらわれた接触様式の特徴、２．課題解決中の発話に現れた注意点や探索方略、思考展開の内容、３．課題解決の方法や課題媒介者との相互作用の様式の違い、などである。これらをもとに、発達障がい者にとっての触覚教材で課題を媒介することの意義を考察する。（竹内）

［話題提供：視覚障がい児と発達障害児への触覚教材使用の事例報告］

特別支援教育の対象になる障がいには様々なものがある。それらは障がいという名前でひとくくりにされるが、それらには大きな違いもあり、異なる障害のある児童が触覚教材をどのように利用するのかを調べる必要がある。そこで、視覚障がい児と発達障がい児を中心に、これまでに報告してきた触覚マトリックス教材だけでなく、触覚を利用する見本合わせ課題や記憶課題や動作課題などを加えたいくつかの触覚教材を用いた指導事例を報告し、障がいの種類と触覚教材の利用との関係を考えたい。（山本）

［話題提供：カード・PC 式ワーキングメモリー訓練教材の効果の検討］

触覚教材に転用可能なワーキングメモリー訓練教材を２種考案した。１つ目はグー・チョキ・パーに代表される三つ巴の絵が単語カード１枚に１つずつ描かれたもので、順にめくって直前の手札に比べて現在の手札が勝ちか負けかを判断する（1-back）、または前の前のカードと比べて勝ち負けを判断する（2-back）ものである。２つ目はﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄで PC 画面上で動作するマトリクス課題で、行列の規則から最後の１つを選択図形から選ぶもので、どちらも自分のペースで個別に実施できる。それらを健常大学生に「宿題」として実施し、事前・事後テストとしてリーディングスパン・テストと逆唱を集団で行って効果を調べた。その結果報告と、ワーキングメモリー訓練教材を作成する上での留意点の検討を行う。（藤本）